日本農業新聞　令和２年５月26日掲載

農業技術プリズム

イチゴ「恋みのり」栽培特性

春先まで収穫切れず「ゆめのか」と併用も

県のイチゴは、以前は9割の栽培面積を占めていた「さちのか」から、大粒で良食味である「ゆめのか」への転換が進み、農家所得の向上が図られてきました。一方で、より省力的に栽培できる品種として農研機構九州沖縄農業研究センターで育成された「恋みのり」が一部の地域で導入されています。この品種の栽培特性を把握するため、「さちのか」の栽培特性と比較検討しました。

2年間の調査の結果、「恋みのり」は最初に収穫する果実が開花してから熟するまでの期間（成熟日数）が短く、収穫開始日が「さちのか」より早くなりました。また、頂花房（最初に出る花房）と第2花房との間に展開する葉の数が少ないため、花房の連続性に優れ、収穫の切れ目が少なくなり、果重も重いことから、比較的単価が高い2月までの早期収量が「さちのか」より多くなりました。

このように「恋みのり」は春先まで切れ目なく収穫ができる特徴があります。今後は主力品種の「ゆめのか」と「恋みのり」の栽培を組み合わせることで、県産イチゴの平準出荷が期待できます。

（県農林技術開発センター農産園芸研究部門野菜研究室主任研究員　前田衡）

イチゴ「恋みのり」と「さちのか」の栽培特性比較

年次	品種	収穫開始日（月/日）	成熟日数※1（日）	花房間葉数（枚）	収量※2 11～2月（キロ/㌃）	1果重 11～2月（グラム/果）
2017年	恋みのり	11/25	32.4	5.1	352(155)	25.4
	さちのか	11/27	35.0	6.5	227(100)	17.6
2018年	恋みのり	12/ 7	34.4	1.9	322(169)	23.7
	さちのか	12/11	39.1	5.7	190(100)	17.4

※1：株で最初に収穫する果実の成熟日数
※2：かっこ内の数字は同年の「さちのか」を100とした場合の比率（%）